

日本英語教育史学会 会報

276

2016 年 8 月 22 日

HiSELT Society for Historical Studies of English Learning and Teaching in Japan

日本学術会議協力学術研究団体 日本英語教育史学会

発行人 日本英語教育史学会 (代表: 江利川春雄)

事務局 〒120-8551 東京都足立区千住旭町 5 番
東京電機大学工学部英語系列 河村和也研究室
tel : 03-5284-5641 fax : 03-5284-5699
e-mail : membership@hiset.jp

会費納入口座 (名義人: 日本英語教育史学会)

ゆうちょ銀行【振替口座】00150-3-132873

三菱東京 UFJ 銀行千住中央支店【普通】0997182

学会公式ウェブサイト www.hiset.jp

第258回研究例会報告

2016 (平成 28) 年 7 月 16 日 (土), 東京電機大学東京千住キャンパス (東京都足立区) において第 258 回研究例会が開催されました。参加者は 24 名でした。

はじめに研究発表が行われ, 久保野雅史氏 (神奈川大学) が「戦後の高校英文法教育史 (その 1) : 検定教科書の 9 年間と, 自由化後の高校現場」というテーマでお話しされました。司会は河村和也氏 (東京電機大学) でした。続いて横山多津枝氏 (防衛大学校) を指定討論者に迎え, 「自著を語る」として江利川春雄氏 (和歌山大学) による「近代日本の陸海軍を英語教育史から見直す: 江利川春雄著『英語と日本軍: 知られざる外国語教育史』を素材に」の発表が行われました。こちらの司会は西原雅博氏 (富山高専) でした。以下に参加者の感想を掲載しますのでご参照ください (①は久保野氏, ②は横山氏及び江利川氏の発表への感想です)。

◇ ◇ ◇

◆興味深い内容でした。特に陸海軍の英語教育は興味深かったです。陸軍と海軍の違い, それ

◆久保野先生の御研究発表「戦後の高校英文法教育史」で, 教科書の種類は「検定受理種目」で決まることや 1978 年度学習指導要領改訂: 「文法教科書の自由化へ」が, グラマラーの軽視ではないこと等を拝聴することができ, とても勉強になりました。群馬から参加して本当に良かったと感謝です。学生さんへの御指導も最高であられる久保野先生から, 日々学べる神奈川大学の学生さんはとても幸せです。

また, 親戚が海上自衛隊幕僚監部の人事教育部 (一佐) だったこともあり, かねてより, 江利川先生の御著書『英語と日本軍』には関心がありましたが, 本日はライブで御著書上梓までの苦労話をも拝聴できて, 江利川先生と連日会える和歌山大学の学生さんが羨ましく思えま

した。田舎国語教師の私にとって勉強になることばかりでした。 (木村一弘)

◆久保野先生のご発表では, 自分が中高で受けた英語教育が, 現代の視点からどのように捉えられるのか, 当時に思いを馳せながら拝聴させて頂きました。小笠原林樹先生にも何度か触れていました。学部生時代, 唯一為になったと感じた (他の先生方, すみません) 英語の授業が小笠原先生の「教養演習 (日英言語文化の比較)」と藤井章雄先生の「時事英語」でした。当時の私にとり, このお二人を「偉い人」ではなく, 「癖のある, いきのいいオジサン」程度 (重ね重ねすみません) に感じる事が出来たのは, 生徒としてむしろ幸せだったのかもしれない。

江利川先生のテーマはかねてより個人的に関心を抱いていたものだけにいつもながら興味深く拝聴させて頂きました。ある言語教育の

軽視、目標言語の一極化等、戦前の近代日本に生じた問題は、そのまま現代日本の外国語教育政策における問題として今、教員等当事者がもっと真剣に議論しなければならないのかもしれない。「自著を語る」という主旨の下、諧謔を織り交ぜた執筆の苦労話も楽しく拝聴させて頂きました。(noblesavage)

◆①今ある『Vision Quest』までの教科書のありようの変遷がよく分かりました。現在のいわゆる「進学校」ではどんな文法の教科書が使われているのか、調べてみると面白いかもしれないと思いました。(DK)

◆①英語教育の「戦後レジーム」形成過程の一つの流れがよくわかりました。(S.T.)

◆①私も、久保野先生と同年代ですので同じ教育環境にあったと思うのですが、先生のご出身の東京教育大学(筑波大学)附属駒場高等学校のレベルの高さがうかがいしれました。先生の学生時代や教育実習にいらしたときの授業の光景などもお話に織り交ぜていただきとても勉強になりました。また、江川泰一郎の『英文法解説』と安井稔の『英文法総覧』はともに座右の書でした。(大学生・院生になってからの話ですが。)自分の興味は1958年の第2回中学校学習指導要領改訂にあるので久保野先生の現在の研究がそこまで発展することを楽しみにしています。(insulae flumen)

◆①高等学校の英文法教科書については以前からももちろん知ってはいましたが、その詳細は初めて知る機会となりました。現在の英語表現の教科書や巷の英文法参考書に見られる見開き式は文法準教科書を基としていることなど多くを学ばせていただきました。またフロアからの、学習指導要領には「文法項目」という言葉は出ても「文法」という言葉を意図的に避けようとしていたという指摘は大変興味深いものでした。

江川先生や安井先生のテキストに実際に触れ、その緻密さ・精巧さに改めて驚かされ、EFL

環境における学習英文法の重要性について再確認させられました。(上野舞斗)

◆②力作・労作の背景の一端を知りました。

(S.T.)

◆②戦前の英語教育、とりわけ当時の日本軍との関係が深く分かってよかった。単なる陸軍と海軍の派閥争いにとどまらない、語学によるものは今もなお存在しているのだろうか。(DK)

◆②昨村上梓された『英語教科書はく戦争をどう教えてきたか』に比べ、格段の苦労をされた感じがうかがえ、勉強になりました。読む前にお話を聞いていたら涙で文字がかすんでいたかもしれません。語学教育と *intelligence* との関係は密接なものがあるのでしょうか、この面でも陸軍は指針を間違えていたのですね。私の曾祖父は陸軍士官学校のあと陸軍大学でロシア語を教えていました。ご著書の中で陸軍大学に学ぶ30歳前後の幹部たちが英語の予習をしてこない様子が書かれている下りが面識のない曾祖父の苦労を彷彿させました。

また、指定討論者の横山先生の落ち着いた語り口で語られる料亭のエピソードも楽しく拝聴しました。今度、差支えない範囲で現在の防衛大学の語学教育についてお伺いしたいものです。お二人の話を伺いながら昔読んだ阿川弘之の『井上成美』を思い出しました。

(insulae flumen)

◆②陸海軍の学校制度は非常に複雑で何度も繰り返し拝読し、なんとか理解しました。そこから学べることは非常に多く、現在の英語一辺倒主義、グローバル人材の育成、果てはダブルスタンダードも同じ轍を踏もうとしているということを別角度から認識させられました。

「自著を語る」では、横山先生が指定討論者として論をまとめられた後、江利川先生から研究方法・資料収集方法、執筆の苦労を伺い、歴史研究の奥深さ・面白さを再認識する機会となりました。(上野舞斗)

<研究発表を終えて>

久保野 雅史 (神奈川大学)

今回の研究発表は、2015 年度に国内研究生として和歌山大学江利川研究室で学んだことが基になっています。「戦後の高校英文法教育史 (その 1): 検定教科書の 9 年間と、自由化後の高校現場」にテーマを絞り、検定受理種目に文法が登場し退場した経緯について、(1) 1970 年と 1978 年に改訂学習指導要領が告示される前後に、『英語教育』『現代英語教育』誌で行われていた議論から、高校英語教育現場の様子を推定すること、(2) 文部科学省で教科書検定業務に携わった元事務官に聞き取り調査を行い、「検定受理種」の変更がどのような手続きを経て提案・検討されるのか確認すること、の 2 点を通して、文法教科書の出現・消滅の理由について迫ろうと考えました。



調査検討の過程で、文法ではなく作文の側から考える必要性が見えてきました。戦時中から伝統的に作られていたグラコン (文法・作文) 教科書では、文法が主で作文は従でした。それを改善し、作文を強化するために文法と作文を分離したと考える方が妥当なのではないか。文法教科書の出現は、文法重視のためではなく、作文重視の副産物ではなかったのか、というものです。

今後は、この仮説を検証するために、当時の教科書編集者や検定担当者への聞き取り調査に加えて、教科書協会の検定専門委員会が果たした役割についても、確認していこうと考えています。

最後になりましたが、研究方法の指導だけでなく貴重な資料を惜しみなくお貸し下さった江利川先生に深くお礼を申し上げます。

<発表を終えて>

江利川 春雄 (和歌山大学)

「富国強兵」を国是とした近代日本の歴史を読み解く上で、陸海軍における外国語教育史は欠かせない。そんな思いで研究に着手したのは 15 年ほど前です。成果の一部は本学会でも発表し、博士論文 (2004) にも盛り込みましたが、全体像の解明にはさらに 12 年を要しました。

幕末以降の軍の近代化に果たした諸外国語の役割、陸軍と海軍における外国語教育の実態と相違、アジア・太平洋戦争期の英語軽視と敗戦との関係、米軍の活発な日本語教育との対比、戦前と戦後の連続性など、難問の連続でした。特に陸軍関係の資料が乏しく、旧軍関係者から提供いただいた資料や証言は今では貴重です (取材後、多くの方が物故されました)。



2015 年 4 月には学校種別の一次原稿を書き上げましたが、本当の試練はそれから。編集部からの依頼で何度も書き直し、量も約半分に精選し、通史的な記述に落ち着きました。一般書を書くことの厳しさは想像以上でした。例会では、そうした裏話や資料収集・研究方法などもお話しさせて頂きました。

末尾ながら、昨年の『英語教科書は<戦争>をどう教えてきたか』に続き、拙著を例会で取り上げて下さった関係各位と、指定討論者として温かなコメントと鋭い問題提起をして下さった横山多津枝先生に厚く御礼申し上げます。

< 発表を終えて >

横山 多津枝 (防衛大学校)

江利川春雄先生のご著書『英語と日本軍 知られざる外国語教育史』の指定討論者をさせていただきました。

本書は、幕末から明治とその後の近代化における日本の歴史を語学教育の観点から著したものであり、軍の英語教育を歴史的に包括的に俯瞰した研究は今までになかったと思います。

先生のご著書の数々は常々、教科書のように読んでまいりましたので、討論者の立場で、皆様に何をいかに伝えるか、悩むところでした。そこで、自分はどのように『英語と日本軍』を読んだのかを振り返り、要点を話し、最後にいくつかの質問をさせていただくことにしました。質問は、ごく個人的なもの、全体に関わるもの、今後の英語教育に関わるものなどです。その後で、江利川先生からご著書の話がなされ、先行研究、資料収集の方法、米軍と陸海軍の英語教育の比較、海兵のオーラルメソッドなどに関してまとめられ、特に戦前戦後の連続性など大いに考えさせられるものとなりました。

討論者を務めるにあたり、何らかの形で防衛省、防衛大学校の英語教育の話をしていただこうと考えておりましたが時間切れになり、失礼いたしました。



『日本英語教育史研究』 第 32 号投稿論文の募集

来年5月に刊行予定の研究紀要『日本英語教育史研究』第32号への投稿論文を募集いたします。どうぞ奮ってご投稿ください。

(1) 送付先・締切：

下記の編集委員長まで送付してください。10月31日(月)を締切とし、当日必着とします。

〒727-0023 広島県庄原市七塚町562 県立広島大学 馬本 勉

(2) 注意事項：

- ア. 執筆者名を明記したものの1部と執筆者名をふせたものの2部を郵便等により送付してください。また、受領した旨を連絡するため、ご自分の宛先を明記した葉書を1枚同封して下さい。
- イ. 投稿規程および標準書式は改訂され、お手許の『日本英語教育史研究』第31号に掲載のものとは大きく異なっています。必ず最新のものをご参照ください。

『日本英語教育史研究』 投稿規程

1. 投稿資格は、入会后1年を経過した会員とする。ただし、編集委員会の依頼による特別寄稿についてはこの限りではない。
2. 投稿論文は日本英語教育史の研究に資する内容のもので、未発表の論文であることが求められる。ただし、すでに口頭で発表し、その旨を明記している場合は、他誌等に投稿中でないことを条件に、審査の対象となる。
3. 各号に投稿できるのは、共著の場合を含め、ひとり2本までとする。ただし、そのうち第一著者となれるのは1本に限られる。
4. 過去に『日本英語教育史研究』に論文(研究ノートを含む。)が掲載されたことのない会員は、

- 論文投稿を前提に、事前指導を2回まで受けることができる。その場合、草稿(途中段階も可)を8月10日までに日本英語教育史学会紀要編集委員会に提出する。投稿論文提出時には、事前指導を踏まえていかなる改訂を行ったかを明示した別紙を論文と共に提出することとする。
5. 投稿論文の分量は、キーワード、英文アブストラクト、図表等を含めて『日本英語教育史研究』の完成ページ(38字×28行)で20ページ以内とする。これを超過することが認められることもあるが、その場合も30ページを超えることはできない。
また、20ページを超える場合には、分量に応じて別途、印刷経費を自己負担するものとする。
 6. 投稿論文の提出は、原則として、ワープロ、パソコンによる打ち出し原稿を正副3部提出するものとし、正本1部には著者名を明記し、副本2部には著者名を伏せるものとする。
提出は郵送もしくは託送によるものとし、原稿とあわせ、受領確認用の宛て先明記の葉書を1枚同封したうえ、締切り日までに必着することが求められる。
 7. 投稿締切りは、毎年10月31日とし、この日が日曜日の場合は、翌11月1日とする。これに遅れた場合には、受理が拒否される。
 8. 投稿論文は、論文審査委員会の審査を経て、掲載の可否、および、論文、研究ノート、調査報告、その他との種別が決定され、著者に通知される。
 9. 掲載が認められた場合には、審査委員会による指摘等を踏まえて完成原稿を作成し、指定の期限内にプリントアウト原稿ならびに電子媒体によるファイルを提出するものとする。その際に、すべての審査コメントに対する対応や修正事項を明記した別紙を添付する。審査コメントと無関係の追記等は原則として認めない。
 10. 著者による校正は2回とし、変更は字句の修正のみとする。内容を改めた場合には別論文とみなされ、掲載が拒否される。
 11. 抜刷りは30部を学会経費によって作成し、著者(共著の場合は第一著者)に対して無償で提供される。これを超えて抜刷りを希望する場合には実費負担とする。
 12. 掲載された論文等の著作権は著者に帰属するが、著作権のうち複製権および公衆送信権の行使については日本英語教育史学会に委託される。
 13. 『日本英語教育史研究』に掲載された論文等を他書・他誌に転載する場合には、転載先書名(予定可)・誌名、発行者等の情報を添え、表題を改める場合にはその旨を明らかにして、書面による転載許可願(書式任意)を編集委員会宛てに提出し、その許可を得るものとする。また、転載にあたっては、初出が『日本英語教育史研究』であることを明記し、号数、発行年を記すこととする。
 14. 『日本英語教育史研究』に掲載された論文等を機関リポジトリを通じて公開する場合には、書面によって編集委員会に通知するものとする。
- 付則 本投稿規程の改正は、理事会の議決により、会員総会に報告するものとする。

『日本英語教育史研究』投稿論文標準書式

投稿論文はワープロソフトを用いて、次の書式によって作成し、提出するものとする。

1. 用紙はA4判を用いる。余白は上下左右とも30ミリとする。

2. 本文の文字のサイズは12 ポイントとし、1 行あたり、和文の場合は38 文字、英文の場合は76 文字、いずれも1 ページ28 行とする。注、参考文献の文字サイズは、10.5 ポイントとする。なお、英字・数字はすべて半角文字とする。
3. フォントは、和文は明朝体、英文はCentury を用いる。
4. 和文のタイトルに副題を付す場合は、主題の後に全角コロンを付ける。
5. 和文の場合、句点は「。」(マル)、読点は「,」(コンマ) を用い、句読点やカッコは全角文字とする。
6. 見出しは、和文・英文ともゴシック体を用い、その前後に1 行の空白を設ける。
7. 第1 ページは以下の順とする。①論文題目、②論文題目の英訳または和訳、③執筆者名とそのローマ字表記 (例 TAKENAKA, Tatsunori)、④日本語または英語のキーワード3 語、⑤100 ~150 語の英文アブストラクト、⑥本文
なお、正本1 部にのみ、冒頭8 行の範囲に著者名を記すこととする。
8. 提出原稿にはページを付すこと。
9. 引用方法、注、および参考文献の記載は、次の例を参考にすること。

引用方法

- (1) 参照した文献に言及する場合、文中に「著者名 (出版年)」もしくは文末に「(著者名, 出版年)」のいずれかの形で示す。

例1) 神保 (1911) は、独案内を含む独習書を好意的に捉えた。

例2) 刊行された訳注書は160 点以上を数え、1887 年がピークという (江利川, 2000)。

- (2) 文献の記述の一部を直接引用するときには、「」で囲み、直後に括弧を用いて引用ページを添える。引用が4 行を超える場合は、「」を用いず、別行とする。

引用を導入する文に著者名 (出版年) を記していない場合は、引用の末尾に著者名、出版年、引用ページを添える。

例1) 岡倉 (1911) は「最初の洋学研究者が、漢文の学び方を踏襲した為、今日まで餘弊風を為して、是より他に解釈の方法は無いと思はれるに至つたのは、嘆ずべくもあり、亦憫笑すべきことでもある」(p.121) と述べている。

例2) 「英語の各単語に訓を施して、返り点によって語順を示す訓点本」(森岡, 1999, p.108) と説明されることもあり、しばしば「虎の巻」と呼ばれる。

例3) この点は竹原 (1934) に次のように記されている。

既成四十有余の基本語表を蒐集し、これが比較研究をなした結果、これらの諸表を合併して一種の総合基本語表を作成し、これが公刊を企図したのである。たまたま昭和七年海外出張を命ぜられた際米国においてソーンダイク博士の改訂基本語表を見るに及び、この改訂版において私の目的がある程度まで果たされていることをさと、同博士及び同書の出版元たるコロンビア大学出版部の許可を得てその日本版を発行するに至つたのである。(pp.3-4)

注

注を加える場合は、本文中の該当箇所にも右肩数字を付ける。なお、脚注、尾注、いずれも可とする。

例：本文)

森が発音表記においてより正確を期したのは、この本を手にする生徒が声に出して読めるようになり、

また、それを聴いて書き取れるようになるためではなかったか。タイトルに「正則」と付けた理由もそこにあるかもしれない⁶⁾。

例：注)

6) 惣郷(1970)は独案内のタイトルについて、「正則とあるのは発音を正則にしたといういみ」(p.328)と述べている。森のものを含め、タイトルに「正則」を冠した独案内は多い。

参考文献

論文の末尾に載せる「参考文献リスト」は、原則として本文中で引用・参照された文献とし、掲載順序は和洋の文献を区別せず、著者の姓のアルファベット順に配列する。

(ア) 単行本の場合

小篠敏明 (1995). 『Harold E. Palmer の英語教授法に関する研究：日本における展開を中心として』 第一学習社.

Swinton, W. (1880). *Studies in English Literature*. New York: American Book Company.

(イ) 紀要等の論文の場合

青木庸效 (1991). 『高等科英語』とその周辺』『日本英語教育史研究』6, 283-287.

Nassaji, H. (2003). L2 Vocabulary Learning from Context: Strategies, Knowledge Sources, and Their Relationship with Success in L2 Lexical Inferencing. *TESOL Quarterly*, 37, 645-670.

(ウ) 単行本の中の論文の場合

大門正克 (1993). 「農村から都市へ：青少年の移動と『苦学』『独学』」成田龍一（編）『近代日本の軌跡9 都市と民衆』吉川弘文館, 174-195.

Swain, M. (1998). Focus on Form through Conscious Reflection. In Doughty, C. & Williams, J.(Eds.), *Focus on Form in Classroom Second Language*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.64-81.

(エ) 筆者が複数の場合

Gardner, R. C., & Lambert, W. E. (1972). *Attitude and Motivation in Second Language Learning*. Rowley, Mass: Newbury House.

高梨健吉・大村喜吉 (1975). 『日本の英語教育史』大修館書店.

(オ) 同じ著者による同発行年の文献の場合

Palmer, H. E. (1936a). The History and Present State of the Movement towards Vocabulary Control. *I.R.E.T. Bulletin*, 120, 14-17.

Palmer, H. E. (1936b) The Art of Vocabulary Lay-out. *I.R.E.T. Bulletin*, 121, 1-8.

高梨健吉 (1985a). 『文明開化の英語』中公文庫.

高梨健吉 (1985b). 『英語の先生、昔と今：その情熱の先駆者たち』日本図書ライブ.

(カ) インターネットからの引用の場合

外国語教育史料デジタル画像データベース作成委員会 (2003). 「明治以降外国語教育史料デジタル画像データベース」(平成18 年度科学研究費助成研究) 外国語教育史料デジタル画像データベース作成委員会. 2010 年4 月20 日検索. <http://www.wakayama-u.ac.jp/~erikawa/database2/>

Smith, R. C. (1999). *The Writings of Harold E. Palmer: An Overview*. Tokyo: Hon-no-Tomosha. Retrieved August 18, 2010. <http://www.warwick.ac.uk/~elsdr/WritingsofH.E.Palmer.pdf>

(キ) 口頭発表ハンドアウトの場合

Anderson, V. (1991). Training Teachers to Foster Active Reading Strategies in Reading-Disabled Adolescents. Paper Presented at the Annual Meeting of the American Educational Research Association, Chicago. (1991, April).

江利川春雄 (2009). 「英語通信教育の歴史(3): 欧文社通信添削会を中心に」日本英語教育史学会第225 回月例研究会口頭発表ハンドアウト (2009 年11 月).

(ク) 原典とともに翻訳も参照した場合

Ichioka, Y. (1988). The Issei : The World of the First Generation Japanese Immigrants, 1885-1924. New York: Free Press. [富田虎男・糸井輝子・篠田左多江 (訳) (1992). 『一世: 黎明期アメリカ移民の物語り』刀水書房.]

(翻訳のみを参照した場合)

イチオカ, ユウジ (富田虎男・糸井輝子・篠田左多江 訳) (1992). 『一世: 黎明期アメリカ移民の物語り』刀水書房.

》) 事務局より

》 会費納入について

会員のみならずには会費の早期納入にご協力いただき、厚く御礼申し上げます。昨年度分が未納の方には8月中に、今年度分が8月末までに未納の方には9月初旬をめどに郵便または電子メールでご連絡申し上げますので、よろしくご対応くださいますようお願い申し上げます。

| | |
|-----|--|
| 会 費 | 一般：5,000円 学生：3,000円 (学生には大学院生を含みます。なお、初年度は免除されます。) |
| 送金先 | ゆうちょ銀行：(振替口座) 00150-3-132873 三菱東京UFJ銀行千住中央支店：(普通口座) 0997182 *口座名義はいずれも「日本英語教育史学会」です。 |

》) 2016 年度 研究例会の予定

今年度より研究例会は5月を除く奇数月の「第3土曜日」に開催します。ただし、1月についてはセンター試験と重なるのを避け「第1土曜日」の開催とします。また今年度は11月についても日程の変更がございます。どうぞお間違えのないようお願いいたします。なお、11月を除き連休に当たりますので、遠方よりお越しの方は交通・宿泊に充分ご注意ください。

- ◆ 第 259 回研究例会 2016 年 9 月 17 日 (土) 広島市で開催予定
- ◆ 第 260 回研究例会 2016 年 11 月 26 日 (土) 東京都で開催予定 (19 日から変更)
- ◆ 第 261 回研究例会 2017 年 1 月 7 日 (土) 東京都で開催予定
- ◆ 第 262 回研究例会 2017 年 3 月 18 日 (土) 大阪市で開催予定

研究例会での発表希望者は、(1) 発表希望月、(2) タイトル、(3) 発表概要 (100~200 字程度)、(4) 使用予定機器、以上の4点を明記の上、発表希望月の前々月 10 日 (3 月発表希望であれば 1 月 10 日) までに日本英語教育史学会例会担当へお申し込みください。

Email: reikai@hiset.jp

>> 新入会員 (敬称略)

- ◆ 持田 哲郎 (もちだ てつろう) 東京都 駿台予備学校講師

>> 英語教育史フォルダ

- ◆ 森 悟 『武信由太郎伝』 今井出版, 本体1,200円

< 第 259 回研究例会の発表概要 >

研究発表

「戦後英語教科書 (読本) に登場した国家元首について～戦争と平和をテーマとして、オバマ大統領の広島演説の前に何が検定教科書で語られていたか」

藤本 文昭 氏 (横浜翠陵中学・高等学校)

【概要】新制高等学校の英語教科書 (読本) には様々な国の元首 (あるいはそれに相当する人物) が登場してきた。1950 年代には英国史・米国史の一部としてエリザベス女王やワシントンやリンカーンが登場した。その後は市井の人を扱う時代が続き、80 年代になって戦争や平和をテーマにした課が増えるに従い、時代を特徴づけた人物、イギリス初の女性首相マーガレット・サッチャー、南アフリカのマンデラ大統領、ドイツのワイツゼッカー大統領や米国のレーガン大統領、そして現職のオバマ大統領まで大物政治家や各国の国王級人物が登場するようになった。その扱いは単なる個人の紹介ではなく、戦争が繰り返される現代史を彼らがどのように考えているか、幸せとは何か、今世界が抱える問題や次世代への課題が何であるかを高校生に考えさせる内容になっている。今、文科省が唱えている「思考力・判断力」を身に着けるための仕掛けがそこには隠されていたのか。それとも単なる偶然なのか。いくつかの検定教科書の語り口を紹介し、教科書編集の意図を探ってみたい。

自著を語る

「戦後における岡山県の中学・高校の英語教育はいかになされたか：
山田昌宏著『岡山県中学校・高等学校英語教育史年表』を素材に」

提案者：山田 昌宏 氏 (日本英語教育史学会会員)

指定討論者：拝田 清 氏 (四天王寺大学)

【概要】戦後の英語教育における最大の問題は英語教員不足だった。英語教員の研修が急務であり、昭和 37 年に岡山県英語教育研究会が設立されて、本格的に実践研究活動が始まった。この研究会が母体となって後の中教研英語部会、高教研英語部会が独立し、県内の英語教育に関わってきた。この両部会の活動を中心にして、研究会、研修会、研究発表、研究論文、生徒の活動成果及びそれらに関わった方々等について具体的にお話したい。

EDITOR'S BOX 今夏はリオ五輪で夜更かしが続いてしまいました。その影響で仕事も思ったようには進まなかったの、これから気持ちを切り替えて頑張らなければ・・・と思っているところです。(若)

第 259 回 研究例会のご案内

日 時： 2016 年 9 月 17 日 (土) 14:00～17:00

会 場： サテライトキャンパスひろしま (広島県民文化センター) 6 階 604 中講義室
広島市中区大手町 1 丁目 5-3 TEL: 082-251-3131

研究発表

「戦後英語教科書(読本)に登場した国家元首について～戦争と平和をテーマとして～、オバマ大統領の広島演説の前に何が検定教科書で語られていたか」

藤本文昭 (横浜翠陵中学・高等学校)

自著を語る

「戦後における岡山県の中学・高校の英語教育はいかになされたか：
山田昌宏著『岡山県中学校・高等学校英語教育史年表』を素材に」

提案者： 山田 昌宏 (日本英語教育史学会会員)

指定討論者： 拝田清 (四天王寺大学)

参加費： 無料

問 合 先： 日本英語教育史学会 例会担当 (reikai@hiset.jp)

◆例会終了後に懇親会を行います。こちらにも奮ってご参加ください。

◆行楽シーズンですので、宿泊をご予定の方は、お早めに各自でご手配ください。

★会員外の方の研究例会へのご参加を大いに歓迎いたします。

【会場案内】(県立広島大学のウェブサイトより)

- ・ 広島駅から電車で約 10 分
(広電「紙屋町西」より徒歩 2 分)
- ・ 広島バスセンターから徒歩約 3 分
- ・ 広島空港からバスで約 60 分
(エアポートリムジンバス)

